



特集 へくさるく

腐ることと慈しむ心

井原 成男



くさるという字を辞書でひいてみた。まず否定的な意味ばかりで、ろくな意味がない。どうしてこんな題を与えられたのかと編集部をうらみ、くさってしまった。しかし、臨床の仕事はたいいてい、気持ちが悪くさってしまつて、やつて来るのではないか。晴れ晴れとしてやつて来る人などいない。そこからが勝負の世界なのである。

思春期やせ症の子がやつて来た。優等生で、自分を人に合わせることで生きてきた。やせは、この子のからだが生じた、初めてのワガママだった。カウンセリングをして心が緩くなった時に示した、少しだらしなくなつた我が子の態度を見て、この子の父親は、「腐つたミカン早く捨てないと全体が腐る」と言い放つた。この一言がとても印象に残つて

いる。やがて分つたのは、この父親自身、これまで実母に逆らったことがなく、自分の腐った部分を捨てて生きてきた人であったということだった。

私は、ミカン箱と違って人間の心には、腐ったものを入れておく容器が必要だと思う。優しい気持ちからではない。人間の心は、腐った部分を捨ててしまつたら、不自由だからである。自分の腐った心を許せなくなるし、また人の腐った心を許せなくなる。そういうことは、生きていくうえでとても不自由なことであり、不便なことなのである。

ミカン箱の例えは面白い。心は箱に似ている。こんな考え方がある。生まれたての赤ちゃんは、自分の腐った心を母親にぶつけて泣く。母親は、しばらくその腐った心を自分の心の中に置いておく、そのことで、赤ちゃんの腐った心は少しだけ毒消しされて、戻って来る。赤ちゃんは自分の心を信頼するようになる。これはおとぎ話かもしれない。でもとてもいい話である。

腐れ縁という言い方がある。これも辞書には改善しようとしても改善できない、よくない関係と書いてある。私は腐れ縁をそのようには考えていなかった。人間は駄目になつてもなかなか離れられない。つまり見捨てないし、見捨てられないこととして取っていたのである。

臨床をしていく上で私の好きな言葉に、存在の連続性というのがある。イギリスの分析医ウィニコットの言葉で、英語で、continuity of beingという。ずっと続いていくという感覚である。よいから続くのではない。腐れていても続くという、その感覚が好きなのである。その感覚に頼っているといつてもいい。

子どもを心身症に追い込んだ親を責めることはたやすい。育児に失敗した親を責めることはたやすい。やがて子どもは親を責めるにいたり、親はそれに反発して、らちがあかない。しかし、私は思うのである。そんなグチャグチャを演じながら、親子で



あることを解消した人はいなかった。腐れながらも関係は続くのである。いや、関係とはどこかで腐れているものなのかも知れない。批判は離れてこそできるものであり、当事者のものではない。

食べ物の話を思い出した。料理法は、焼く、煮る、炒めるの三つかと思っていたら、レビストロースという人が腐るということも料理法の一つに数えていた。はじめはピンとこなかったが、チーズがそうであり、納豆やクサヤもそうである。納豆が駄目な人は多いし、クサヤに至っては、私も最近までだめだった。しかし、慣れれば美味しい。あのウンコのような匂いが、堪らなく懐しいのである。思えば母親は、子どものウンチを見て、「よく出たね、どっさり出たね」と褒める。その思い出は、誰にとっても、そんなに遠い昔のことではなかったはずである。ウンチは、人が嫌うほど汚いものではない。試みに、自分が育てている子どものウンチは不思議と汚くないものである。自分の子どものもの

は、どこかで自分と連続していて、異和感が少ないのであろう。腐ったものを排除するのはそれが腐っているからではなく、心が異和感を感じているからなのである。クサヤを受け入れたのは、それが美味しいものとして心に同化した時であつたはずである。

新鮮なものはやがて古びて腐っていく。それが自然のプロセスである。新鮮さをいつまでも保とうという望みは、どこか不自然である。腐らないものは、もはや新鮮でもない。ものは腐るからこそ、一瞬の輝く美味しさがある。それを匂というのである。人間も同じである。いつまでも若さを保つというのは不自然である。同じように、心にも匂がある。それは昔流の言い方でいうと、「一期一会」と



